令和６年度第２回高知県スポーツ振興県民会議　議事要旨

日時：令和６年11月５日（火）13:30～15:30
場所：高知会館　白鳳
出席：委員24名中19名が出席
出席委員：青木会長、井奥副会長、桑名副会長
池田委員、大坪委員、尾下委員、刈谷委員、川上委員、新開委員、須内委員、田井委員、竹島委員、常行委員、寺村委員、長岡委員、濵田委員、深見委員、前田委員、矢野委員

議事：（１）令和６年度スポーツ施策の取組状況等について
（２）第３期高知県スポーツ推進計画のバージョンアップについて

＜報告事項＞県民体育館の再整備に関する検討について

１　開会

知事挨拶

本日は各委員の皆様大変ご多用中のところ、今年度２回目のスポーツ振興県民会議にご参加をいただたこと感謝申し上げる。
常日頃、県のスポーツ振興に関しまして一方ならぬお力添えをいただいていること、この場をお借りし御礼を申し上げる。
今年度２回目ということで、１回目の会議からこの約半年間、特に県のスポーツの競技力向上ということに関しては大変うれしいニュースが続いている。
昨日も青木会長、また桑名市長にもお出ましをいただき、パラリンピックで見事金メダル、銀メダルを獲得されました池選手、鬼谷選手の県民栄誉賞、そして高知市民栄誉賞の授与というような形でお祝いをさせていただいた。パリのオリンピック・パラリンピック合わせて、４人のメダリストが誕生し、オリンピックの金メダルは92年ぶり。
その後の女子レスリングでは清岡もえ選手が世界選手権を制されたというようなうれしいニュースも続いている。
さらに、いわばスポーツ総合力の物差しとなるかつての国民体育大会が、今年からは国民スポーツ大会と名称変更し開催され、その総合順位も38位ということで、一時期本当に最下位争いをしていたことからするとずいぶんと向上してきた。
サッカーの分野においても、高知ユナイテッドＳＣがＪリーグ入りに向けて、ラストスパートに臨んでいるという状況。
こうした形で、スポーツに対する機運が本県では大いに高まっている。

この機運の高まりを持続させ、今後の県民のスポーツ参加の拡大、競技力の向上、さらには、スポーツツーリズムの促進を通じた観光振興、地域の活性化、こうしたものに結びつけていきたいと思う。
本日は、本年度のスポーツ振興関係の主な施策の取り組み状況をご報告させていただくとともに、現在進行中の第３期スポーツ推進計画の来年度に向けたバージョンアップについて、検討状況をご説明し、ご意見を賜りたいと思う。
併せて、桟橋通りにある県民体育館が再整備を検討する時期になっている。
別途検討会を設け、あるべき機能、規模、整備の候補地の考え方について議論を進めており、南中高の跡地の活用問題なども関連するため、年内には今後のスケジュールを含めて、県民体育館の再整備について一定の方向性を示したいと思っている。こちらも本日ご報告をさせていただき、お気づきの点があればご指摘をいただきたい。
本県のスポーツ施策がより実効性のあるものとなるよう、忌憚のないご意見をお伺いできればと思っている。

青木会長挨拶
パリのオリンピック・パラリンピックでは、高知県選手が多大な活躍をした。そして金メダル３個、銀メダル１個、高知県民にとって非常に嬉しい出来事だった。
また、県や市の方も栄誉賞を作っていただき、感謝申し上げる。選手のやりがいに繋がるのではないだろうか。
スポーツをやっていて活躍をすることは、選手はもちろん、その他の関係者の方々にも非常にやりがいや生きがいを感じることにつながると思う。
それにより、さらに関心が高まり、応援をしようということにつながっていくのではないか。
プロ野球でも、藤川選手が阪神の監督になったということで、安芸の球場は大変盛り上がった。
身近な人が活躍するというのは、大変うれしく感じると同時に、私たちの関心を呼ぶということにつながってくると思う。
多くの選手が活躍してくれるような、そういった環境づくりに努めていくことが非常に大事だと思っている。
こういった活躍の背景には、選手自身の取り組みの姿勢や努力はもちろん、それぞれの競技団体等のサポートがある。そして、関係者の地道な努力、そういったものがつながって初めて成果として表れたのではないかと思う。
人口が非常に少ない高知県では、競技人口も少ない状況に置かれているものの、その中でどうすればできるのかということを追求していくことが、いろいろな組織にとっても大事なことであるし、私たちスポーツに取り組む者にとっても大事なことで、やればできるということをぜひ体現していきたい。
本日は今年度２回目の県民会議。今年度の取り組みの進捗状況と、第３期高知県スポーツ推

進計画のバージョンアップについてご意見をいただくことになっているので、活発な議論をお願いする。

２　議事

議事（１）（２）について、資料１、資料２、資料４を使用して説明。
また、報告事項について、資料５を使用して報告。
資料３については時間の都合上説明を割愛。

●刈谷委員
バージョンアップの重点項目については、アスリート指導者のキャリアアップの問題であるとか、或いは子どもたちのアーバンスポーツへの親しみの取り組みという視点は非常に早くバージョンアップできたと思う。
この中で、部活の地域移行もしくは開放の問題。この基軸が展開されてないのを少し心配している。
県立高校は二分化の状態であり、資料の中では民間のクラブ等の実態を把握されていないので、どうしても構造がわかりにくい。
私立の方はほとんど外部コーチを入れてるにもかかわらず、公立は数ヶ所という実態。そのバランスの問題等について、ここではどうしようもないかもしれないが、どこかでプロジェクトか何かとしてやらないといけない。
今が非常にいい機会で、県民が世界的な場面で活躍し、また連日、他のスポーツもチャンピオンシップを取っているという状況、環境の中で、しっかりとプロジェクト化して取り組んで、それを引き継いでいくという計画を練っていただきたい。

○事務局（スポーツ課）
部活動のことについては、県立と私立の状況ということをしっかり整理させていただきたい。
部活動の地域移行については、部活動のあり方検討会を設置をして教育委員会主導で会議を行っており、その中でも議論をするとともに、第３回の県民会議においても、その状況についてご説明をさせていただきたいと思う。

●寺村委員
現在少子化でなかなか子どもを集めるということだけでも非常に難しい状況で、ｅスポーツが市町村でも興味を持たれている。今年は非常に夏休みも暑く、子どもたちがいる場所がない。
小さな中山間地域では、使われてない集会所等があって、テレビゲームについては子どもたちは駄目だと言われるが、ｅスポーツは堂々と、高齢者の方も一緒にできるということで、

取り組みたい市町村がいくつか出てきているようだ。
ただゲームを置くのではなく、専用のソフトが必要。市町村の課長等に話をすると、とりあえずテレビにつなげれば何とかなるだろうと思っているが、そうではない。
それから、ダンスやヨガなどの室内で取り組める競技を夏休みに取り組めるよう、指導者がいれば、ぜひ市町村の方に伝えていただきたい。

○事務局（スポーツ課）
ｅスポーツについては、ゲーム障害などのこともあり賛否両論あるということも承知している。他県では障害者と一緒に活動できることや、高齢者に楽しんでいただけるというようなプラスの面もあると認識しているので、まずはｅスポーツというものを知っていただくことも非常に重要ではないかと捉えている。今後、他県の事例も参考にしながら、機会を提供していきたい。

●須内委員
先だっての全日本の中学校の校長会でも、部活動の地域移行が研究題として出されており、いろいろな報告や、それぞれの県の実践というところで話を伺った。全体的に、抱えている課題は同じような傾向であったと思う。
私の勤務校で言うと、参加する部員の人数が少ない関係で、拠点校ではなく合同チームの取り組みが多いと感じる。全校生徒 82 名だが部活動が非常に多く、野球部、バレーボール部、サッカー部については、それぞれ単体ではチームを組めないが、近隣の中学校と合同でチームを組んでいるというのが現状。
また柔道部については、地域の指導者が全て面倒を見てくれていて、いわゆる地域の部活動というような形になっている。
神戸では、2026 年９月から平日と休日は教員がノータッチでいく方針を打ち出している。
アンケートを取り、どのような子どもさんがどのようなスポーツをしたいかということと、地域でどのような指導者がいて、どこまで関わりができるのかということを調べていると聞いた。ただ、神戸と同じようにやるのは難しいのではないかと思っている。
また、今までの大会運営は、教員が大きく関わってプログラム等を作り、編成をしていた。そういった存在をなくして、民間の、思いがある方の集合体でスムーズにスタートができるのかということも懸念材料として声が上がっている。

○事務局（スポーツ課）
部活の地域移行に関しては、他県の取り組み等の情報収集を教育委員会とともにしていく。議会の方でも、民間の企業、団体との協力による指導者の確保ということについて、ご意見が出ていたので、どのように連携ができるかというところなどの研究もしていく。状況についてはご報告をさせていただきたいと思っている。

●濵田委員
当校では、バレーボール、バトン、コーラス、書道、水泳部には、部活指導員を充てている。
現在、本校では、保険もかけて、部活指導員の方が引率も可能ということにしている。
放課後や土日に指導員の方が来てくださり、今のところ良い状態で活動ができている。

●長岡委員
県立の方も部活動指導員さんが直接引率をしたりとか、単独で指導するというような状況の整備はできているので、そういった部分では少しずつ専門性のある方にお願いをするという環境は整っているかと思う。
ただ、前にも少しお話をさせていただいたが、地方の方に指導者が少なくて、指導者をお願いするのが難しい学校も中にはある。
実際、高校であれば高校の教員で経験を持ってる方などが指導をずっとしていく。指導力、技術力の向上については、県立学校は異動が伴うので、継続して長い間部活動を担当するということが難しいという状況がある。

○事務局（スポーツ課）
部活動の指導者の確保というところについては、おっしゃっていただいたように地域の市町村の方が非常に厳しい状況はあると思っている。中心部の高知市などについても、今後継続した指導者の確保というところは対応が必要と思っている。教員だけではカバーできないという中で、民間の団体の方にどのように協力をいただくのか、また、直ちに指導ができないにしても、少し中期的な視点で子どもたちの活動に加わっていただける人材をどのように見つけ出していくのか、そういったところは高知県のスポーツコミッションさん等の協力も得ながら、発掘の取り組みを展開をしているところ。
人材の確保というところについても、あらゆる可能性を考えて、確保に向けた検討、対応をしていきたいと思っている。

●前田委員
重点ポイントの中に、若者のスポーツであったりツーリズムの推進などが入ってきて、少子高齢化の中でも、高知県らしさもあるのかなと思う。アーバンスポーツも競技人口１位というような記事もあり、そういう空気感を帯びてきたかなと思う。
経済波及効果を出していただいてるが、ここにはおそらくサイクリングなどの、これから進めていこうとされているところの人数が入ってきていないと思う。宮崎県などと比較して戦っていくのであれば、高知県独自の環境を活かしたものをどんどん売りにしていく必要もあるのではないかと考えたので、そういった交流人口の捉え方をしていくのがいいのではないかと思う。

もう1点、アリーナについてはこれから40年50年使っていくこととなる。新しい施設となってくると、他の県でも今、長崎でスタジアムとアリーナとホテルができたりしている。高知県の真ん中に作るという話であれば、一体型のビジネスとしてとらえて、どのように民間の方の力を借りるか、さらにはそれを通じて県内の底上げをもっとできるような体制をとれるようにしていった方がいいかなと思う。

○事務局（スポーツツーリズム課）
経済波及効果について、今回は合宿やプロスポーツのキャンプで観戦に来られた方、サイクリングであっても大会の参加者を計測している。
今後、一般的にサイクリングで来られる方をどのように計っていくのか、検討していきたいと思う。

●池田委員
スポーツ人口を拡大させることは、私どもの町もいろいろやっているがなかなか定着しない。今は少子化もあるが、そもそも子どもさんがなかなか忙しい。
一番関心を持たせるのは、アスリートと接する機会を持つこと。直接見る機会というのは、ものすごく子どもにとって刺激が大きいところ。アスリートと接する機会をどんどん提供することは必要。
本町も、例えば日本生命さんと協力して指導できる方を呼び、野球や卓球などを指導していただくというようなこともしながら、興味を持ってもらうような動きをしているが、それ以上に進めるには、やはり少子化の中でなかなか難しいという課題はあるところ。

●桑名副会長
学校の部活動の問題も、高知市は他の郡部から比べたらまだまだチームがあるが、それでももうほとんどの種目で合同チームが出てきている状況で、皆さんのお話を聞いても、やはり外部コーチというのはどこかに限界があると思う。
学校単位のスポーツというところからもう1歩離れて、学校単位のスポーツは前提としながら、クラブチームの活用、クラブチームであれば様々な学校の子、部活動をできない子たちが集まって1つのチームがつくれる。
ただその時に重要なのが、そこに指導者はいると思うが、施設が借りられないというような問題があり、やはり立ち上げるときに学校を貸してもらえないからどこかないだろうかという相談があり、知っているところのグラウンドを借りるというようなパターンがある。行政としては、そういったクラブチームが来たときには公共のところを優先的に使っていただくようなことも考えていかなければならないと思っている。
もう1点スポーツツーリズムについて、高知市もプロキャンプに関して県と一緒にやっているが、施設の問題があり、もう目一杯で多分これ以上入らないと思う。

それともう１つは宿泊所、ホテルの形態がどんどん変わってきていて、プロが使えるホテルが１つか２つしかない。３つプロチームがきたら厳しい状況になると思うので、そのあたりは高知市も、宿泊者のあり方と施設をどのようにまわしていくか頭を悩ましているところ。
県民体育館の再整備については、底地が高知市なので、全面的に一体となってやっていきたい。資料５の４の基本方針の策定に向けた重点ポイントで、同種施設との役割の明確化というところ、これは高知市の市営のグラウンドになろうかと思うが、ここは県市連携の中でお互いがかぶらないような形でやっていきたいと思う。
そしてもう１つ望むならば、アーバンスポーツの施設を県民体育館のどこかに整備できないか。BMX は県の方のお力をいただき、高速道路の高架下のところで、民間の方々が自分たちで国交省の土地を借りて、BMX の舞台を作っている。スケボーも高知市内にも市営のところにあるんが少し手狭。そこを広げるのも難しい状況なので、憩いの場のようなところにそういったものが併設されたらありがたいなと思う。
ただ、これは県市連携で進めていきたいと思うので、協力してやっていきたい。

○事務局（観光振興スポーツ部）
プロのスポーツについては、野球、サッカーを中心に、温暖な気候を活かして特に１月２月、観光のオフシーズンを埋めていく形で長くやってきている。
施設やホテルの受け入れの部分で対応が厳しくなっているため、旅館組合さんとも連携しながら、誘致の継続に向けて一緒に取り組みたいと思っている。併せて、新たなスポーツというところで、屋内スポーツの方にも少しウイングを広げ、誘致に取り組みたいと思う。
県民体育館の再整備については、ご協力をお願いする。
高知市との役割分担も議論をさせていただければと思っている。

●深見委員
例えば四国銀行さんであれば野球、サッカーだと高知銀行というようなところはあるが、資金提供も含めて、まだまだ他県よりもいわゆる企業色が弱いと思うし、連携があまりうまくいってないことは当行としても反省しているところ。
例えばユナイテッドであれば、そこの選手がフタガミさんなどの県内企業で働いているものの、まだまだ不十分。資金的に弱いチームなので、そういった選手をバックアップする体制、地元企業が連携して何かできることがもっとあるのではないかと考えている。
企業や経済連、経営者協会、商工会などが、１歩踏み込んでスポーツに携われたらいいなと考えている。

●井奥副会長
障害者スポーツセンターに調べてもらうと、今年、中級を１人、指導員が研修を受ける。
全体で 208 名おられるが、140 人ぐらいは初級の方で中級が 50 人弱、10 人程度が上級とな

っている。
特に東部は7人で、たった3%ぐらいしかいない。それぞれ仕事を持った方が研修を受けて指導員になるわけで、難しい面はあるかと思うが、1つは質の向上が大事。
140名の初級の方がいらっしゃり、そういう方の中で今回1人だけ希望があり中級に行かれるということだが、初級の方々が予算的な面でダメなのか、職場の関係でダメなのかということを、個別に状況をお伺いし、金銭的な部分であれば予算的な部分で対応していただければ、より高度な資格を取っていただけるのではないか。時間的な部分であれば難しいとは思うが、そのあたりは裾野を広げていただき、並行してやっていかなければいけないと思う。、質を上げるということにもご配慮いただければありがたい。
それともう1点、資料1で、1週間の子どもさんの運動時間の話があった。授業以外でスポーツに関係する時間が60分未満の人の割合が全国平均よりも高い。一方で、子どもの運動能力は全国18位ぐらいで、非常に伸び率が高いことが新聞でも報道されていた。大学との運動プログラムの開発で、非常に効果が出てきたということなので、そういう効果の出たプログラムがあるのであれば、全県的に広がりを持っていただければありがたい。

○事務局（保健体育課）
このプログラムは小学校から中学校までの9年間を見通したプログラムを作っており、小学校1年生であれば、平衡感覚や巧緻性、こういう運動をやれば良いということを示している。
それを画像、映像で見られるようにしている。今は1人1台タブレットを持っており、小学校の先生が実技が苦手なところもあるため、先生が実技を見せられない場合に、子どもがそれを見てやるような形となっている。
併せて、陸上運動が難しいというご意見もいただいている。現在、陸上の走る、跳ぶというようなものも作り始めており、少しずつ体力や運動能力を上げていきたいと思っている。

○事務局（スポーツ課）
前段のスポーツ指導員の養成については、裾野を広げるということ、質的な向上、そこはしっかりと対応していきたいと思っている。障害者スポーツセンター、社協さんの方でいろいろと情報収集をしていただいていることを踏まえて、予算の確保なども対応していきたい。

●田井委員
昨日、障害者のボッチャ大会があり、ランプを使っている選手を母親がアシストするが、母親が年を取り、一緒にやっていけなかったり、母親の調子が悪くて棄権するケースがあった。可能であれば、選手と同世代の人で、選手のことをわかってくれて、一緒に大会に出てくれる人が見つかってくれたらいいなという保護者の声があった。若い世代の方で、ボッチャをアシストするような方が見つかれば、というのが1点。

ｅスポーツについて、先週うちのファミフェスというイベントの中でｅスポーツを入れた。ｅスポーツ協会の方に全面的にやっていただいたが、結構お金もかかり、さらには、なかなか継続的にやっていけるようなシステムではなかった。聞くところによると、高齢者の検診のときにもｅスポーツが活用されるようになっているそう。
そういう意味でもｅスポーツの普及が必要。ねんりんピックの種目にもなっているので、協会と話をしながら進めてもらえたら。
部活の地域移行について、四国の会議に参加した際に「地域部活」ではなく、「地域クラブ」だと言われた。地域クラブが何なのかというと、例えば、バトミントンをうちのクラブが作って、それを今まで中学校の名前で出ていたのが、クラブの名前で出るように切り替わったというのが地域クラブ。
学校の部活を外に出すというのは、なかなか課題が大き過ぎて、国もまだそこまで話がちゃんと出ていない。それについては、令和８年以降に出てくるのではないだろうかと昨日の四国ブロックの中で話があった。
指導者が地域の方になると、働いているため夜の８時ぐらいからのレッスンとなり、子どもに対して８時からの部活でいいのかという話があり、放課後すぐ、もしくは６時ぐらいとなると、高齢者の方ばかりが指導者になっていくという問題もある。
インバウンド向けスポーツについて、四国 88 ヶ所巡りで海外の方がたくさん来ている。
この 88 ヶ所を使ったツーリズムの仕組みを作り、海外から人を呼び込むというのがいいかと思う。
私が以前 88 ヶ所の札所に伺った際、海外の方が声をかけてきて、高知の方まで乗せて帰った。ツーリズム的にそういう仕組みを作り、88 ヶ所巡りの環境を整えると、インバウンドの方にいいのではないかと思う。

○事務局（保健体育課）
地域部活動という言葉が、国から最初に示されたもので、学校部活動に対しての地域部活動のようなイメージ。
現場からもわかりにくいという声があり、名称については地域クラブ活動という言い方に変わってきているので、今は地域クラブという言い方になっていると思う。
田井委員の言われるように、高知県においても現在地域クラブ活動が 23 ある。昨年は５だったのでかなり増えてきた印象。
学校部活動から出したものではなく、多くがスポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブなどから延長していく形で、中学生についてもそのクラブが担っていただける部分は県中体連の方へ申請することが増えてきているので、必ずしも学校から完全に移行していくという形だけではなく、地域で担っていただく活動も広がりつつある。

○事務局（スポーツツーリズム課）

四国88ヶ所のスポーツツーリズムについて、我々もすごく可能性を感じており、四国ツーリズム創造機構や、サイクリングを推進していくことで4県連携協議会を作り。何かできないかとを協議しているところ。

○事務局（スポーツ課）
ボッチャの話について、大会の前などにご相談をいただければ、個別に関係の方にもご相談させていただき、若者で協力いただける方がいるのかというところは、こちらの方でも対応していきたいというふうに思う。また、市町村の方にも人材確保の課題があれば是非とも投げかけてくださいということをお伝えしていこうと思う。
またｅスポーツについても、協会ともいろいろと情報共有、連携をさせていただいており、今後の取り組みについてはしっかり協会とも関わりを持ち、対応していきたいと思う。

●尾下委員
スポーツ医科学の活用に関連して、スポーツ科学センターの事業実績などをご紹介する。
今年度の上半期の実績で、県民の皆さんの健康増進のために行っている体力測定やトレーニングサポートなどの一般利用については315名。前年同期比で217%、倍増している。
これは、4月に高知新聞のフリーペーパーミリカで取り上げていただいたり、スポーツ教室のインストラクターの先生やスポーツ教室の受講者の方々に定期的にご利用をいただいているということが主な要因。
今後もメディアでの露出やＳＮＳ等を活用し、情報発信に力を入れていきたい。
アスリート対象の強化策については、大幅に利用者数が増えている。
この流れに沿って、競技団体の連携を深め、令和9年度の目標に向かっていきたい。
先だっての国民スポーツ大会については、ソフトテニス、レスリング、ソフトボール、バスケットボール、カヌーのスプリント、柔剣道、陸上競技にセンタースタッフ3名と、外部のサポートスタッフの方4名、合計7名が帯同した。本番に向けた栄養やメンタル、けがの予防などのコンディションサポートを実施し、それぞれ好成績の1つの要因になったのではないかと思う。
今後とも、競技団体やアスリートに頼りにされるセンターに向けて継続していく。
昨年の県民会議でご指摘をいただいた、スポーツ科学センターの狭隘対策については、春野総合運動公園の体育館2階にある旧喫茶室が空きになっており、そちらを活用するべくスポーツ課の方で仕様や予算の検討をいただいてるところ。
県民体育館の再整備については、前回の会議の中でも発言させていただいたが、1つは、スポーツだけではなく、大相撲、プロレス、コンサート、それから高知市には選挙事務でも使っていただいているので、多機能な施設にすべきだと思う。一番の懸念は、県民体育館は年間15万人の方にご利用いただいいるが、その利用が途絶えると、特に高齢者中心にスポーツから離れてしまうということが必ず起こるので、現在の県民体育館と新県民体育館の中

断期間をなるべく小さくすることが必要不可欠ではないかなと思う。

○事務局（スポーツ課）
ＳＳＣの効果的な運営というところと、県民体育館の再整備につきましても、主に施設の課題があるというふうにとらえている。また、今管理をしていただいている財団を含め、幅広くご意見を伺う必要があると思っている。皆様にもご意見伺ったうえで、どのような機能・設備が必要かというところをしっかり議論し、整備を検討していきたいと思っている。

●大坪委員
キッズや科学センターの方のサポートをさせてもらっている。できれば春野に合宿所のような施設があり、そこで食事提供のようなことができれば、選手のサポートに役立つ。例えばバイキング方式でどのように取るだとか、そういうことをやらないといけない。国スポのサポートメンバーから情報を得ると、やはり一応試合前にそういった話をしていても、結局サポートしてる方に聞いてくるし、全然わかってないこともある。身近にそういった施設があって食べられるといいし、そういった施設があると県外の方などにも利用していただける。春野へ行くと施設が閉まっているような状況なので、人材不足等もあると思うが、あると効果的ではないかと思う。
障害者のスポーツについて、選手が県外に行くとなると、高齢であったり、あまり車を運転できないことがあり、指導者の方で誰が行けるかという話になる。先ほど、大会のときには県の方に連絡してくれという話があったが、県外に行くとなるとバスや運転手の問題が出てくる。補助金の充実という言葉もあったので、そういう方面にも使ってもらえたらと思う。

○事務局（スポーツ課）
合宿所のことについては、直ちにというのはなかなか難しいが、対象の方へのサポートの仕方ということについて、現状でどのようなことができるのかというところを詰めて話をさせていただければと思う。
障害者の県外遠征、大会への参加については、できる限りのサポート補助をさせていただきたいと思っている。現状で中央競技団体で登録されて、競技スポーツ活動を積極的に行われている方のご意見や、そういった方をサポートされている方のご意見などを情報収集し、必要な補助がどういったものであるか、今一度整理したいと思う。

●川上委員
スポーツ科学センターで問題点があったとすると、私たちスポーツドクターの関与が少なかったこと。これは私たち自身の問題だが、幸い高知大学の医学部の方で、そういう取り組みに関与したいという者が現れたので、また今後お話をさせていただき、スポーツ医科学での障害予防について取り組みをお願いしたい。

どの施設でも、マンパワーの不足が一番大きな問題と考えている。大学生にお願いするということが上がってきているようだが、実際、大学生に来ていただき、そういった活動ができているのかどうか。できていないとすれば、どういうことが問題点となっているのか。
例えば、何らかのそういった活動をすることにより、学生に地方での就職のインセンティブがあるだとか、何かメリットを持たせるような形での活動ができると、もう少し活発になると思う。

○事務局（スポーツ課）
大学生の協力については、高知リハビリテーション専門職大学との連携協定を結んでいるが、現状十分に進んでいないと認識している。高知県スポーツ振興財団、ＳＳＣの方と協議し、今後積極的な協力をどのように求めていくのかということに対応していきたいと思う。

●竹島委員
池田委員がおっしゃったように、生で見る、間近で見る経験が大事。国スポに帯同し、自転車競技を初めて生で観戦したが、これからの子どもたちにもこういったことを経験させてあげたいと思った。
レスリングも観戦し、桜井先生の教えだと思うが、試合が終わってからも選手一人一人が次のために、トレーナーとともに体重管理等もきちんとやっていた。その中で西内選手が１位になったが、次のロスでは絶対金メダルを狙える逸材だと感じた。
国スポ等での活躍を、今回のバージョンアップの重点ポイントというところにどうやって結びつけるかということで、この感動や熱が冷めないうちに、資料４にあるジュニアを対象とした新たなスポーツ大会の開催支援及びメダリストによる体験教室の実施。こういうところにもっと人数を集めて、みんなに体験してもらいたい。
また、アスリートのキャリア支援について、その人たちが高知へ帰ってきたいと思ったときに、ちゃんとした職場があれば安心して帰って来れる。
田井委員がおっしゃっていたように、若い人の自由な時間は、どうしても夜遅い時間になる。企業と提携するときに、企業でお金をもらいながら、指導者が必要な地域に行って指導できるような環境の整備が必要。先のことを考えてやらないと、指導者の問題は現状では厳しいと感じている。

○事務局（スポーツ課）
子どもたちに本物を見せていくという取り組みについては、本当に重要だと思っており、まずバージョンアップの強化ポイントの重点ポイントの３、オリンピック・パラリンピックの熱を活かして、メダリストにご協力いただくということはもちろん展開していきたいと思っている。メダリストだけではなく、いわゆるマイナーな競技なども、全国でトップレベルの方や、体験会などの活動をされていることも多々あるので、明らかに目立っている競技以

外でも、トップアスリートのご協力を得られる機会というのはたくさんあると思う。
これは県だけではなく、民間の団体や市町村の方での取り組みなども展開されているので、そういったところと情報共有、連携をして、機会の提供に取り組んでいきたいと思うし、スポーツツーリズムにも絡む部分だと思っている。
キャリア支援については、アスリートが中心ではあるが、指導者のキャリア支援というところも含めて対応していくので、皆様にもご協力をいただければと考えている。

●新開委員
スポーツツーリズムを考えた時に、スポーツを起点にして、物流とか人流を動き出させること、そういう動きを作るのがスポーツツーリズムだというふうにとらえています。
資料４のポイント４のところでスポーツツーリズムの推進と書かれてあり、バージョンアップの考え方のところで、人流を生み出していくという意味においては、県外の入込客数ということに着目をするのは当然だと思うが、一方で高知県内の動きを作り出すことも大事かと思う。
インバウンド向けのスポーツツーリズムの強化というのは、ハードルが高いところもあるため、身近なところに目を向けると。
例えば、先日高知ユナイテッドの山本社長と話したが、ホーム観戦ツアーに80歳を超えてるような年齢の方もどんどん応援に来ており、結構その割合が高い。
例えば宿毛の老人施設からバスを出して、応援をして元気に帰っていく。試合が終わった後に商店街に立ち寄り、その辺を動いてもらうことで多少経済効果も出てくるのではないか。
このように県内の人たちを動かしていくようなことも、我々旅行会社が外に出していくことが主な仕事にはなるものの、そういったことにも知恵を絞っていけると活力ある県づくりに貢献できると考える。

○事務局（スポーツツーリズム課）
スポーツツーリズムについては県外だけではなく、県内のスポーツ参加も作り出そうとしている。
特にプロスポーツが来たときは、野球教室やサッカー教室の中で県内を巻き込んだり、またＪリーグについては、県内東西から来てもらえるような仕組みもチームと一緒に今作っているところであり、引き続き県内外からの誘客を求めて進めていきたいと思う。

●常行委員
今回子どものスポーツ参加や、部活動という点で非常に学校や大学といったものの貢献が求められるのかなと感じている。
神戸でも民間に委託をするということで、メディアではかなり出ているとは思うが、現状まだ民間企業２社というところで実証実験の段階で、実際その現場の方やスポーツ協会等、い

ろいろなところにヒアリングをすると、実際に民間に丸投げをすることによる弊害というのは都市部の方も危惧していて、指導者に対して当たり外れがあるのではという不安は、おそらく全国どこでも一緒だろうと感じている。
個人的には、やはり貧困家庭の子どもや格差といったものが、民間に委託をされることによってより浮き彫りになるんのではないかと危惧している。
アクティブチャイルドプログラムにもあるとおり、施策というのは根拠ある数値で進められるべきものだと認識しており、そういった意味で高知県では、今回の重点ポイントや体育館の整備を見ても、非常に考えながら行動されているなと感じた。
公務員の方ももちろん、少子化と同じようにスタッフの方も少なくなっていて、こういった事業をいかに効率よくまわしていくのかを考える必要がある。大変なところは拝察しているものの、実際の実務がわかっている人が、どのような形で委託を進めていくのかがすごくポイントになると感じている。

○事務局（スポーツ課）
民間に協力をいただいた部活動の地域移行等の取り組みについては、スポーツ庁でも示されている実践実証事業の事例というのも複数出ているものの、往々にして成功事例、プラスの部分に光を当てたところが多いとは思う。
おっしゃっていただいたように、取り組みの中で課題になっている部分や実際にやりにくい部分もしっかりとらえ、県外での事例を参考にして今後の検討、取り組みに生かしていきたいと思う。
格差が出ないようにという点についても、かなり難しい部分ではあるものの重要なポイントだと思うので、それを意識した検討を進めていきたいと思う。

●矢野委員
国スポの順位が38位になったことは、今まで高知県が積み重ねてきた努力の賜物だと思う。全高知の強化やスポーツ科学センターの活用も、上昇の要因には欠くことのできないものになっていると思う。
あとは、これをどんどん加速させていくということになるが、1つの問題として、バージョンアップの重点ポイントの2番にも書いてあるように、例えば、アスリートが本県から大学等で県外に行った場合に、それをどうやって戻すか。先ほど竹島委員もおっしゃられたが、すごく大きな課題だと思う。
その中で、無料職業紹介所で、登録企業の求人情報を紹介するという具体策が示されたことは、非常に大きな前進だと思う。
アスリートのキャリア支援について、アスリートからは要望があるが、登録企業が集まらないということが出てくる。なぜかというと、アスリートに支払う報酬があると思うが、どこの企業も人不足のため遊ばせておく人がいない。となると、アスリート自身が、キャリア支

援の中でスキルを身につけていく必要がある。
一昔前はセカンドキャリアという言い方をしていましたが、今はデュアルキャリア、つまり、アスリートをしながら並行して新しいキャリアを作っていくのがメジャーなやり方。
アスリートに対して、その活動をしながら、将来的には企業人として、専門家としてやっていけるような教育も併せてやっていくことが求められる。
ちょうど高知大学では、4月から新しくスポーツ芸術競争専攻という大学院のコースを作った。これから自分のキャリアを活かして、さらに活躍するために学びたいというような問い合わせが来ている。それを大学としても受け入れて、そして高知県に高度化して返すような、返還的な仕組みづくりができたらいいなと思う。
アスリート等のキャリア支援の推進をポイントに挙げてやっているということは非常に評価できることだと思うし、これが具体化するように進めていただきたいと思う。

○事務局（スポーツ課）
まずはアスリートと県内の企業などをつなぐことに集中して取り組んでいきたいと思っているが、先ほどおっしゃっていただいたデュアルキャリアの考え方で、アスリートの多様なスキルアップに向けてどのような取り組みができるのかということについては、この仕組みを検討するにあたって他県での取り組みも参考にさせていただいたので、そういった事例をもう一度収集し、スキルアップに向けた対応としてどのようなものが展開されているのか参考にしつつ、具体的な対応について検討していきたいと思う。

3　閉会

以上

署名 青木章泰